九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

資本主義的統制について : ブラウオイのブレイヴァマン批判(1)

遠藤, 雄二

https://doi.org/10.15017/4491747

出版情報：經濟學研究. 52 (1/4), pp.373-383, 1987-02-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

資本主義的統制について

——ブラウオイのブレイヴァマン批判(1)——

遠　藤　雄　二

目　　次

1. はじめに
2. 資本主義社会における労働過程
——その構成と概要——
3. 資本主義的統制
(1) 統制と利害
(2) 封建制から資本主義へ
(3) 剰余をおおい隠し確保すること
4. むすびにかえて

1. はじめに

H. ブレイヴァマンの大著『労働と独占資本』[1] は英語圏に衝撃を与え，労働過程をめぐる論争の「起爆剤」となったが，同時に論争の中で「この著作の不十分性がますます明確になり」[2]，ブレイヴァマンをのりこえようとする試みがなされてきた。そのような試みのうち，最も注目すべきものの1つとしてブラウオイの近著[3] があげられる。この著作はわが国でこれまであまり紹介，検討されていないが，ブラウオイのグローバルな労働体験とそれを基礎とした労働現場のグローバルな理論化は詳細に検討する価値をもつものである。

ブラウオイは1968年より4年間南部アフリカのザンビアに滞在し，前半の1年半はザンビア銅産業監督局のリサーチ・オフィサーとして銅鉱業の多国籍企業を観察している。この中で，彼は一方では労働組合ならびに政府との関係の中で経営者の意思決定がどのようになされているのかを調べ，他方で労働力に関する大規模な面接調査を行なっている。後半の2年半はザンビア大学に移り調査・研究に従事している。後進国の労働現場を調査した後，彼はアメリカに渡り，シカゴ大学に籍を置きながら1974年6月から75年4月までの10カ月間多国籍企業アライド社[4] のエンジン部門でマシン・オペレーターとして働いている。アライド社では，当時より30年前にドナルド・ロイが働いており，ブラウオイは彼から大きな刺激を受け，自己の調査と彼のそれとを前著[5] で比較している。以上の経験でも飽き足らないブラウオイは，さらに社会主義国で働き，参与観察を行う。ハラスティ『労働者国家の労働者』から刺激を受けた彼はハラスティが働いていたハンガリーに飛

1) Braverman, Harry, *Labor and Monopoly Capital : The Degradation of Work in the Twentieth Century*, Monthly Review Press, 1974, 富沢賢治訳『労働と独占資本』岩波書店，1978年。
2) Littler, Craig R., *The Development of the Labour Process in Capitalist Societies : A Comparative Study of the Transformation of Work Organization in Britain, Japan and the USA*, Heinemann Educational Books, 1982, p. 27.
3) Burawoy, Michael, *The Politics of Production : Factory Regimes under Capitalism and Socialism*, Verso, 1985.
4) アライド社とはインターナショナル・ハーベスター社とのことである。津田真澂『現代経営と共同生活体』同文館，1981年，171ページ，参照。
5) Burawoy, M., *Manufacturing Consent : Changes in the Labor Process under Monopoly Capitalism*, The University of Chicogo Press, 1979.

び，1983年の秋にシャンペン工場と紡績工場で，1984年の夏に機械職場で働いている[6]。

以上の3つの全く異なる国での経験をもとにして世界労働論とでも言うべきものを構築したのが本書の後半部分である。本書の前半部分はブラウオイの理論的基礎となっているものであり，その全体がブレイヴァマン批判で貫かれている。本稿では前稿のブレイヴァマン論争の紹介と検討[7]の続編として，まず前半部分にスポットをあてることにする。しかしながら，紙幅の関係上そのうちの一部分にしか触れえないことをあらかじめお断りしておきたい。

2. 資本主義社会における労働過程
——その構成と概要——

3つの異なる体制の下での労働体験，参与観察を行なったブラウオイの基本的立場はアカデミズムのそれとは全くちがうものである。「私は初期資本主義，発達した資本主義，国家社会主義そして植民地の下での労働者存在が意味するものと最も抽象的で最もグローバルな分析を完全に結合させようと努めた」[8]。彼にとっては何よりも労働者の現実が問題なのであり，しかもそれを机上で考察するだけでは全く不十分である。労働者の生きた経験に自己の研究を根づかせることなく労働者の頭ごしに彼らの利益を擁護するのだと主張することは，誤りであるだけでなく，エリート主義の危険を犯すことにもなるのである[9]。だからこそ，ブラウオイは長年の肉体労働と精神労働を経験したブレイヴァマンを強烈に意識しており，本稿で紹介する前半部分をすべてブレイヴァマン批判，正確に言えばブレイヴァマンの止揚にあてているのである。

しかしながら，ブラウオイがどんなに労働現場を重視したとしても，彼の最大の課題は労働現場の経験を通した新しい理論の構築である。実際，彼のグローバルな労働体験に驚かされたわれわれは，彼のブレイヴァマン批判を読み進むうちにその博識にもう一度驚かされることになるのである。「具体的世界との不断の対話を通してマルクスを修正し，読み直し，説明しなおすこと」，こうすることによって「ブレイヴァマンをのりこえる新しいマルクス主義を構築すること」[10]，これこそブラウオイの成し遂げようとする課題である。

*　*　*　*　*

マルクスは『資本論』の中で資本主義的生産様式の評価と分析を結合させるという離れ技をやってのけたが，「そこでは批判と科学が同一の研究の2つのモメントになっており」，「2つが調和して発展している」。しかし，ブレイヴァマンの『労働と独占資本』はこの2つの調和に失敗し，両者は互いにさまたげあっている[11]。これが『労働と独占資本』に関するブラウオイの全般的評価であり，彼は5点にわたってブレイヴァマン批判とそれに対する自己の理論を展開している。

第1は，資本主義的統制の本質をなすものは何かということについてである。ブイレヴァマ

6) Cf., Burawoy, *The Politics of Production*, pp. 1-2, 10.
7) 拙稿「労働者階級，労働過程，主体形成」3節，『経済学研究』(九州大学) 第51巻第4号，1986年2月。
8) Burawoy, *op. cit.*, p. 19.
9) Cf., *ibid.*
10) *Ibid.*, p. 23.
11) *Ibid.*

ンは構想と実行の分離に求めたが，資本主義的労働過程の本質をなすものは剰余をおおい隠しつつ確保すること (obscuring and securing of surplus) である[12]。では，なぜ構想と実行の分離は資本主義的統制の本質をなさないのであろうか。ブレイヴァマンは構想と実行の分離に関して次のように述べている。

「資本主義的生産様式が分業の面でとる歩みのうちでもっとも決定的なものを一つだけあげれば，それは手と頭との分離である。それは，この生産様式にそのはじめから内在しており，資本主義的管理のもとで資本主義の歴史全体を通じて発展する。だが，生産規模，急速な資本蓄積が現代株式会社に利用可能なものとした資源，構想のための装置と訓練を受けた職員——これらの要因によって手と頭との分離が系統的にきちんと制度化されうるようになったのは，過去1世紀のことにすぎない。」[13]

見られるように，精神労働と肉体労働の分離がなぜ資本主義的生産様式に固有な原則であるのかということは必ずしも明らかではない。精神労働と肉体労働の分離はあらゆる階級分裂の生産様式に共通な原則であり，それを資本主義的生産様式に固有なものとすることはできないのである。ブレイヴァマンは資本主義的労働過程の本質を明確にしうる構想と実行の分離の特殊な形態にまで踏み込んでいない。彼は「敵対的社会関係」と「統制」を資本主義的生産様式の前提としてしまい，それらが資本主義的生産様式の下で有する特殊な意味を明示していないのである。

では，資本主義的労働過程の本質を明らかにする場合にどのような視角が必要であろうか。ブレイヴァマンは動物の世界と比較しながら述べている。動物にとっては構想と実行の分離は不可能であるが，人間にとっては合目的的行動を取るがゆえに，常に分離が可能である，と[14]。しかし，動物と人間の比較は資本主義の下での構想と実行の分離を明らかにするものではない。これにかわる視角は社会主義概念であるが，ブレイヴァマンの社会主義概念は彼の資本主義像を逆転することによって導き出されている。つまり，ブレイヴァマンの社会主義概念は構想と実行の分離として特徴づけられた資本主義を逆転したもの，したがって構想と実行の統一，その具現者としてのクラフト・ワーカーに求められており[15]，ブラウオイにとって，それは資本主義的労働過程について新しいものを示したことにはならないのである。資本主義的統制の本質は非資本主義的生産様式との比較を通してのみ理解されうるのであって，ブラウオイはそれを封建制に求めている[16]。

第2は，ブレイヴァマンの理論的枠組についてである。周知のようにブレイヴァマンは階級の「客観的な」内容に自己の研究を限定した[17]ために，様々な論者から多くの批判がだされてきた[18]が，ブラウオイによる批判はその中で

12) Cf., *ibid.*, 63.
13) Braverman, H., *op. cit.*, p. 126, 富沢訳, 142ページ。
14) Cf., *ibid.*, pp. 45-49, 富沢訳, 49-53ページ。
15) ブレイヴァマンはこのような批判が出てくることを念頭に置いて次のように述べていた。「私の労働観を支配しているノスタルジアは，いまだ来ぬ時代へのものである。その時代とは，労働者のために，労働過程の意識的，合目的統御から生ずる仕事の充実感が，科学の成果および技術の創意と結びつけられ，だれもが，この結合からなんらかの利益を受け取ることができるような時代である」(*ibid.*, p. 7, 富沢訳, 6-7ページ)。
16) 以上, cf., Burawoy, *op. cit.*, pp. 23-24.
17) Cf., Braverman, *op. cit.*, pp. 26-27, 富沢訳, 28-29ページ。
18) たとえば次のようなものがあげられる。Coombs, Rod, "Review Article *Labor and Monopoly*

も特に注目すべきものである。労働の「主体的な」側面に十分注意しなければ，資本主義的管理の理解はできない。しかしながら，問題は「客体」から「主体」を分離させることだけではなく，その区別自身にもある。これまで，経済的「土台」は「客体的」条件，つまり「即時的階級」を規定し，「客体的」条件は「上部構造」，つまりいわゆる主体的側面によって活性化され「対自的階級」を形成すると考えられてきたが，これは誤りである。生産過程それ自身が経済的，政治的，イデオロギー的側面の分離できぬ結合物と見なされるべきである。したがって，ブラウオイにとっては主体―客体の枠組は資本主義的管理の考察にはふさわしくない。現実には，生産過程の3領域が結合して労働過程を規定し，また闘争形態を形成しているのである。

労働者たちがなぜ，どのようにして「みずからのためにより『現代的な』，より『科学的な』，より非人間的な労働監獄を築きあげること」[19]を黙認しているのか，また「人類の福利と幸せにとってかくも明らかに破壊的である制度を存続させていくことに唯々諾々と甘じている」[20]のか，こういう秘密を生み出している労働者の日々の反応を，「即自的階級―対自的階級」というシェーマを用いることによってブレイヴァマンは無視しているのである。労働過程を「客観的な」ものとして理解したために，ブレイヴァマンは「管理」の特殊な形態，特にテイラリズムの日々の影響を理解できなかったが，同様にこの一面的な観点のために彼はイデオロギーとしてのテイラリズムと実際のそれとを混同しているのである[21]。以上がブラウオイによるブレイヴァマン批判の第2点である。

第3に，第1の点と密接に関連しているブレイヴァマンの社会主義観についてである。ブラウオイは次のように批判する。ブレイヴァマンの資本主義批判はクラフトの自治という理想に基づいたものであって，社会主義のビジョンを狭くするものである。生産現場の自治の復活だけでは社会主義への移行は不可能であり，そのためには生産関係の転換が必要である。このようなブレイヴァマンの狭隘な社会主義観は彼が構想と実行の分離に焦点を絞りすぎたためである[22]。

第4は，ブレイヴァマンが労働過程と社会とを結びつけている方法についてである。彼は次のように述べている。

「資本主義的生産様式が，個人，家族，および社会の要求の総体をとらえ，それを市場に従属させることによって資本の要求に奉仕するようにつくりかえるのは，独占時代になってからである。この発展を理解することなしに，新しい職業構造，それゆえにまた現代の労働者階級を理解することは，不可能である」[23]。

ブレイヴァマンは資本がサービス産業をとらえ，家事労働を資本主義的生産関係の中に組み

Capital", *New Reft Review*, No. 107, Jan.-Feb., 1978; Wood, Stephen, ed., *The Degradation of Work?: Skill, Deskilling and the Labour Process*, Hutchinson, 1982; Zimbalist, Andrew, *Case Studies on the Labor Process*, Monthly Review Press, 1979; Thompson, Paul, *The Nature of Work: An Introduction to Debates on the Labour Process*, Macmillan Press, 1983; Storey, John, *Managerial Prerogative and the Question of Control*, Routledge & Kegan Paul, 1983.

19) Braverman, *op. cit.*, p. 233, 富沢訳，256ページ。

20) *Ibid.*, p. xiii (foreword by Paul Sweezy), 富沢訳，ix ページ。

21) Cf., Burawoy, *op. cit.*, pp. 24-25, 63.

22) Cf., *ibid.*, pp. 25, 63.

23) Braverman, *op. cit.*, p. 271, 富沢訳，296ページ。

込むことを証明した。このようなサービス産業の急増はまた構想と実行の分離という同じ過程である。資本が次々に活動範囲を広げ，それを自己のすでに征服した領域にくみ入れるにしたがって，古い職業が破壊され親しい職業が生み出される。こうして，職業構造の形成と再形成は資本の法則に従うようになる[24]。このようにブレイヴァマンは資本による社会の支配を強調しているが，ブラウオイが問題とするのは資本による支配の条件である[25]。

第5は，ブレイヴァマンの分析が特殊な時間と場所の産物であるということである。マルクスの政治経済学の古典の扱い方に従えば，『労働と独占資本』の限界は合衆国における資本主義の特殊性の反映と見なすべきである。この著作は合衆国における全く妨害のない資本の支配，反対者を吸収したり駆逐したり，変化と批判をとり込み，時には抵抗を排除したりする資本の能力を表現している。こうして『労働と独占資本』はそれが生みだされた社会的，歴史的文脈と密接に結びついているがゆえに，ブレイヴァマン自身オルターナティブを提示することなくますます絶望的に資本主義批判にしがみついているのである[26][27]。

以上がブラウオイによるブレイヴァマン批判ならびに彼をのりこえる理論提示の5点である。早速，第1の資本主義的統制について詳しく紹介しよう。

24) Cf., Burawoy, *op. cit.*, p. 22.
25) Cf., *ibid*, p. 25.
26) Cf., *ibid*, pp. 25-26, 64.
27) もっとも，ブレイヴァマンは資本主義批判だけにしがみつき，それでよしとしていたのではない。この点については，前掲拙稿，123-124ページを参照されたい。

3. 資本主義的統制

(1) 統制と利害[28]

ブレイヴァマンはクラフトの破壊から統制概念を導き出している。技能と知識の剝奪による「労働の衰退」という彼の結論は，資本主義の下で不変のもの，労働過程を資本主義社会の労働過程たらしめている基礎的構造にはあてはまらない。それは資本主義の下で可変のもの，労働組織の多様性にあてはまるものである。したがって，「労働の衰退」は資本主義的労働過程を貫く本質とは見なされず，その本質を把握するためには資本主義的生産様式を非資本主義的生産様式と比較することが必要である。これがブラウオイのアプローチである。

しかし，まず問題を限定しておかなければならない。一体なぜ統制が必要であろうか。ブレイヴァマンは次のように述べている。

「資本家が労働時間を買い入れるときには，その成果は確実でないし確定されたものでもないので，このような（原料，道具などを買うような——引用者）仕方で正確にまえもって計算することはできない。このことは，労働力に支出された彼の資本部分が『可変』部分であるという事実を表わしているにすぎない。この部分は生産過程中に増大する。彼にとっての問題はその増加分がどれほど大きなものになるかである。こうして，資本家にとっては，労働過程にたいする統制権が労働者の手から自分の手に移るということが不可欠な条件となる。この移行は，労働者からの生産過程の漸進的疎外として歴史上現われる。資本家にとっては，それは管

28) 以下は特にことわらないかぎり，cf., *ibid*, pp. 26-29.

理の問題として現われる。」[29]

このように，管理の課題は労働の支出の不確実性を減じ利潤の生産を確保することである。しかし，なぜ不確実性を減じる必要があるのだろうか。なぜ統制が必要なのであろうか。これに対するブレイヴァマンの答えは，資本主義的社会関係は「敵対的」であるという前提の中にある。しかし，この敵対的な関係とは何であろうか。もっと特殊的には，資本主義的社会関係の何が敵対的なのか。そして，特殊資本主義的なものは何なのか。ブレイヴァマンはこれらの問題に対する完全な答えを提示していない。

ブレイヴァマンは労働と資本の客観的利害の対立について述べている。「労働過程は資本家の責任となっている。このような敵対的な生産関係の背景のもとでは，資本家が買い入れた労働力の『十全な有用性』を実現させようとする課題は，自己の目的のために労働過程を遂行させようとする者と，他方で労働過程を担っている者との，相対立する利害によって，いっそう困難なものとなる。」[30]

しかし，なぜ利害は対立するのであろうか。これに関してはマルクスが多くのことを述べている。利害の対立の物質的基礎は支払労働に対する不払労働の，必要労働に対する剰余労働の増大の中にある。これは資本主義的生産様式に刻まれた傾向である。すなわち，資本と労働の経済的関係はゼロ・サムであり，資本の利益は常に労働の損失である。

では，労働者は自己の利益が資本の利益と対立するということをどのようにして認識するようになるのであろうか。短期的な日常の利益を決定するものは何であり，それはどのようにして長期的な根本的利益に転化するのであろうか。これについてのマルクスの答えは『フランスにおける階級闘争』の中で明示されている。すなわち，プロレタリアートは階級闘争を通じてのみ資本との敵対関係を理解するようになり，自己の歴史的役割を認識するのである[31]。更に彼によれば，労働者階級の成熟は生産力の発展に依存しており，生産力の発展は資本に対抗する革命的団結の物質的基礎となるものである[32]。

29) Braverman, *op. cit.*, pp. 57-58, 富沢訳，62-63ページ，強調は原文。

30) *Ibid.*, p. 57, 富沢訳，62ページ。

31) この点に関して，ブラウオイは更に注で『哲学の貧困』と『ドイツ・イデオロギー』を援用している（「経済的諸条件がまず最初に国民大衆を労働者に転化させたのである。資本の支配は，この大衆にとって，共通な1つの地位を，共通な諸利害関係をつくりだした。だからこの大衆は，資本に対してはすでに1個の階級である。しかし，まだ，大衆それ自体にとっての階級ではない。さらに，われわれがその若干の局面だけを指摘した闘争において，この大衆は自己を相互に結合するようになる。大衆自体にとっての階級に自己を構成するのである。大衆の防衛する利害が，階級的利害となる。しかし，階級対階級の闘争は1つの政治闘争である。」『哲学の貧困』『マル・エン全集』大月版，4巻，189ページ。「競争は諸個人をいっしょにするにもかかわらず，また彼らを，たんにブルジョアのみならずそれ以上にプロレタリアを，相互に孤立させる。それゆえにこれらの個人が団結しうるにいたるまでには――この団結がたんに局地的なものであるなら話は別だが，そうでないかぎり，そのためには必要な諸手段，つまり大きな工業都市と廉価で迅速な通信運輸が大工業によってまずできていなければならないということは問わぬとしても――長い時間がかかるのだし，またそれゆえに，これらの孤立した諸個人，いやそれどころか，孤立化を日々再生産する状況のなかに生きている諸個人，を向こうにまわして組織されている勢力のどれ1つといえども，これを打ちまかすには長い闘争がどうしても必要なのである。反対のことを望むということは，競争がこの特定の歴史時期に存在しないことを望むこと，もしくは諸個人がばらばらのままでは彼らのどうしようもないところの状況を念頭から没却することを望むこととまさに変わりないであろう。」『ドイツ・イデオロギー』，同上，3巻，57ページ）。

32) この点に関してもブラウオイは注で援用してい

しかしながら，歴史の示しているところでは，階級闘争の結果，資本と労働の利害の対立は緩和し，しばしば調和さえしてきた[33]。たとえば，ヨーロッパの主要な闘争目的である普通選挙は労働者階級を資本主義的秩序にくみこむ手段となり，プロレタリアート的意識が彼らの中に浸透するための妨げとなった。交換価値という点では資本と労働の関係はゼロ・サムであるが，使用価値という点ではノン・ゼロ・サムである。すなわち，相対的剰余価値の生産，労働生産性の増大によって，資本は自己の地位を危うくすることなく労働に対する譲歩を拡大することができるのである。マルクスはこの可能性に対してほとんど注意を払っていない[34]。発達した資本主義国においては，資本による譲歩と生活水準の向上によって資本と労働の利害は調和しているのである。

利害が対立しているのか一致しているのかということを考える場合に決定的な問題は，労働者の日常生活を組織している利害は変更できぬ所与のものではないということである。利害は生産され，再生産されるものである。したがって，資本と労働の利害は対立していると仮定するなら，資本主義的統制の本質を見誤ることになるのである。

かくして，ブラウオイにあっては，現代資本主義の下では資本と労働の利害の対立という古典的命題は妥当しない[35]ものであり，利害に関する理論を発展させること，利害が対立するのならばその対立の条件を探ることが課題となるのである。

(2) 封建制から資本主義へ[36]

利害を所与のものとしないならば，ブレイヴァマンの統制概念とは何であろうか。その機能は何であろうか。ブラウオイにあっては，非資本主義的生産様式の視角から資本主義的統制の特殊性を明確にすることによってのみ，これらの問題に答えることができる。この場合，資本主義と比較されるのは封建制である。

ブラウオイは歴史的具体的な封建制ではなく，純粋型としての封建的生産様式を措定する。こうするのは，封建的生産様式概念を資本

る（「工業が発展するにつれて，プロレタリアートの人数がふえるだけではない。彼らはまた，ますます大きな群によせあつめられる。彼らの力は増大し，彼らはその力をますます自覚するようになる。機械がますます労働の差異を消滅させ，また賃金をほとんどどこでも一様に低い水準におし下げるので，プロレタリアート内部の利害や，彼らの生活状態は，ますます平均化されてくる。」「ブルジョアジーをその無意志の担い手とする工業の進歩は，競争による労働者の孤立化のかわりに，結社による労働者の革命的団結をもたらす。」『共産党宣言』，同，4巻，483-484，487ページ）。

33) 資本と労働の利害が一致するようになってきたとするブラウオイの指摘に対しては，当然多くの異論があろうが，ここでは私自身の評価には触れないことにしたい。この評価は現代資本主義の性格，新しい体制への移行という全体的な評価と関連しており，変革主体形成論の世界的動向とともに別稿で詳しく展開したい。

34) もっとも，マルクスはこの点について全く触れていないわけではない（「資本が急速に増大することが労働者の利益だというのは，次のことを意味するにすぎない，すなわち，労働者が他人の富を急速にふやせばふやすほど，ますます大きなおこぼれが労働者の手に落ちてき，ますます多くの労働者を働かせ，生みだせるようになり，資本に依存する奴隷の数をますますふやせる，ということである」。『賃労働と資本』『全集』第6巻，411ページ，参照）。しかし，マルクスがほとんど注意を払わなかったのは，ブラウオイによると，独占資本主義の下ではじめて労働者階級の闘争がノン・ゼロ・サム的になるのであって，資本主義の自由競争の時代には労働と資本の闘争は使用価値に関しても交換価値に関しても一般にゼロ・サム的であるからである（cf., Burawoy, *op. cit.*, p. 70）。

35) この点から，ブラウオイは「即自的階級・対自的階級モデルは下部構造・上部構造モデルとともにもはやそのオリジナルな妥当性，有効性を持たなくなっている」（*ibid.*, p. 70）としている。

36) 以下，特にことわらないかぎり，cf., *ibid.*, pp. 29-32.

主義的生産様式の本質を解明するために用いるからである。そして，生産様式を次のように定義づける。生産様式は2つの社会関係が結合したものである。1つは自然に対する人間の社会関係[37]，つまり生産力の関係ならびに労働過程の関係であり，一般に技術的分業と言われているものである。これをブラウオイは relations in production[38] と呼ぶ。もう1つは人間の人間に対する社会関係，つまり労働生産物の分配と消費の関係ならびに剰余が直接的生産者から吸い取られる関係のことであり，一般に社会的分業と言われているものである。これを彼は relations of production と呼ぶ[39]。

では，純粋型としての封建制の特徴は何であろうか。労働地代を念頭に置くならば，それは第1に，必要労働と剰余労働が時間的にも空間的にも分離していることである。第2に，農奴は生活手段を直接に取得する。自分で作物を生産し消費する。第3に，農奴は労働用具を占有し，自分の意思に従って使用する。第4に，領主は自分の土地では夫役労働を確定することによって労働過程を組織する。そして，農奴は領主のために働く。

資本主義と比較するなら，封建制の下では剰余は目に見えるほどはっきりしている。マルクスの言葉を借りるならば，「剰余価値と他人の不払労働の一致は……目に見え手でつかめる形で存在している。」[40]「どの農奴も，自分が領主のために支出するものは自分自身の労働力の一定量だということを知っている。」[41] だから，「神秘的なものはまったくなにもない」[42]。剰余価値は農奴の生活手段の獲得とは別に生産されるから，領主は剰余を取得するためには経済外的手段を行使しなければならない。

資本主義の下では，第1に，必要労働時間と剰余労働時間は時間的にも空間的にも分離していない。その区分は生産組織の中での区別としては表われない。それは労働者にも資本家にも

37) 『ドイツ・イデオロギー』には「人間による自然の加工」，「人間による人間の加工」という言葉が出てくるが（廣松渉編輯版，河出書房新社，1974年，38ページ），芝田進午氏は前者を「労働の技術的過程」，後者を「労働の組織的過程」と規定し（『人間性と人格の理論』青木書店，1961年，63ページ，傍点は原文），「労働過程は，本質上，技術的過程と組織的過程の統一にほかなら」ないとしている（同上，74ページ）。ブラウオイのいう relations in production とは，「有用物を生産するために」「労働者同士ならびに労働者と管理者がとり結ぶ社会関係」（Burawoy, *op. cit.*, p. 13）のことであって，芝田氏の「労働の技術的過程」は等閑視されている。この理由については注38）を参照されたい。

38) この言葉を使用する含意について，必ずしも説得的ではないが，ブラウオイは次のように述べている。それは第1に，生産力の発達に関するマルクスの考えに見られる楽観的目的論を避けるためである。第2に，relations in production は所与のものではなく，relations of production と同様に再生産されなければならないものである。あらゆる生産様式にとって決定的なこの特徴が「生産力」概念を使用することによって一貫して看過されてきたためである（cf., Burawoy, *op. cit.*, p. 71）。

39) relations in production と relations of production のちがいについて，ブラウオイは次のように述べている。「relations in production は資本と労働の搾取関係と区別されなければならない。前者は労働の組織にかかわっており，後者は剰余が直接的生産者から吸い取られる関係にかかわっている。……relations of production は剰余の取得と分配の両方を含んでいる。relations of productions は生産様式を独自に規定するが，異なる生産様式の中に同一の relations in production，同一の労働過程が見いだされる」（*ibid.*, pp. 13-14）。

40) マルクス『資本論』第3巻，『全集』25巻a，1015ページ。

41) 同上，第1巻，『全集』23巻a，104ページ。

42) 同，第3巻，1016ページ。神秘的なものがない理由をマルクスは次のように言う。「人的従属関係が，物質的生産の社会的諸関係をも，その上に築かれている生活の諸部面をも特徴づけている……からこそ，労働も生産物も，それらの現実とは違った幻想的な姿をとる必要はないのである」（同，第1巻，103-104ページ）。

目に見えない。一方には，剰余価値の生産，したがって資本家の生産，他方には，賃金の等価の生産，したがって労働者の生産，という結果だけを人は経験するのである。第2に，労働者は生産過程中に生活手段を取得できない。生活手段を得るためにはまる1日働いてその一部を賃金として受け取らなければならない。第3に，生産手段は資本家のものであって，労働者はそれを自分で好きな様に使用することはできない。第4に，封建制の様に経済外的強制によって剰余量が確定されているわけではない。それを決定するものは労働の統制をめぐる職場での，あるいは労使の交渉を通した経済闘争である。第5に，労働者が働きに行くのを強制されるのは経済外的機構の脅威のためではなく，何よりも生きるためである。労働者は生き残るためには，毎日毎日工場の門をくぐらなければならないのである。

資本主義的生産様式の下では，生産活動そのものは単に物（使用価値）を生産するだけでなく，一方での資本家（剰余価値）と他方での労働者をも生産する。労働過程，すなわち relations in production は relations of production を再生産するのと同時にその関係の本質をおおいかくす。対照的に，封建的 relations in ploduction は領主と農奴との relations of production を再生産しなければ，おおい隠しもしない。封建的 relation in production は領主と農奴の搾取関係を浮き彫りにするがゆえに，その関係を再生産するためには経済外的要素の媒介を必要とする。剰余は目に見えるほどはっきりし確定しているので，領主はいつそれを手に入れるのか知っている。ところが，資本主義の下では必要労働時間と剰余労働時間の分離が時間的にも空間的にもないために，資本家は剰余を得ることができるかどうかはっきりしない。生産過程の中では剰余は労働者にも資本家にもわからない。かくして，資本主義的統制のジレンマは剰余価値を確保しながら同時にそれをおおい隠したままにしておくことである。

次に，その内容に移ろう。

(3) 剰余をおおい隠し確保すること[43)]

労働過程（relations in production）は剰余価値の存在（relations of production）をどのようにしておおい隠すのであろうか。ブラウオイによれば，従来のマルクス主義理論は次のように述べてきた。第1に，relations in production は relations of production から分離している。前者は工場内で，後者は工場外で生じる。生産点では労働者はお互い同士ならびに管理者と影響しあうが，資本家は一般に姿を表わさない。もちろん，この relations in production と relations of production との分離は所有と統制（支配）の制度的な分離に直接対応している。

第2に，relations in production は労働の相互依存と同質化による集団的意識をもたらすよりも，細分化された利己的な生活という結果をもたらす。技能のヒエラルキーは労働者同士を相互に競争させる。こうして労働者は全体を掌握することができなくなる。労働者は自分たちの細分化された労働をこえて考えることができなくなる。ましてや，労働過程をこえて relations of production を理解することはなおさらできない。ブレイヴァマンは述べている。「構想と実行との分離の必然的な結果は，労働

43) 以下，特にことわらないかぎり，cf., Burawoy, *op. cit.*, pp. 32-35.

過程がいまや別々の場所や別々の労働者群に分割されるということである。……いまや生産の物質的過程は，それに従事している労働者によってだけではなく，しばしば下級の監督職員によっても，多かれ少なかれ盲目的に営まれる。生産単位は，離れたところにある頭脳によって監視され・調整され・統制されている手のように動くのである」。[44]

第3に，ブルジョア・イデオロギーがプロレタリアートの意識に浸透し，彼らが資本に対立する階級として自己を認識するのを妨げる。レーニンは述べている。「ではなぜ，自然発生的運動，最小抵抗線に沿う運動は，ほかならぬブルジョア・イデオロギーの支配にむかってすすむのか。それは，ブルジョア・イデオロギーが，社会主義的イデオロギーより，その起源においてずっと古く，いっそう全面的に仕上げられていて，はかりしれないほど多くの普及手段をもっているという，簡単な理由による。……労働者階級は自然発生的に社会主義に引きつけられるが，それにもかかわらず，労働者に自然発生的にもっとも多く押しつけられてくるものは，もっとも普及している（そして，たえず多種多様な形で復活されている）ブルジョア・イデオロギーである。」[45]

これまでのマルクス主義が剰余をおおい隠すことについて述べてきた以上の3点は，ブラウオイにとってはきわめて不十分なものである。なぜならば，これまでの理論は剰余価値と relations of production をおおい隠すような生産点での意識とイデオロギーの特殊な型について何も言っていないからである。

次に剰余価値の確保という点ではどうであろうか。従来のマルクス主義理論は剰余の存在を当然のこととしており，それゆえその量を問題として来た。たとえばブレイヴァマンは述べている。「人間労働は，周知のようにそれが消費する以上のものを生産できる。そして，この『剰余労働』を生みだす能力は，しばしば人間あるいはその労働が有する特殊な神秘的な能力として取り扱われている。実際にはそれはそうしたたぐいのものではなく，労働が自己を再生産しおわった時点，換言すれば，労働がそれ自身の生活手段ないしはその等価物を生み出した時点を越えて行なわれる労働時間の延長にすぎない」。[46]

この指摘は超歴史的な一般化である。重要なことは次のことである。つまり，消費する以上に生産するという可能性について述べることとその可能性を現実のものにすることとは全く別の事柄である。そして，この可能性を現実のものにすることこそあらゆる支配階級が直面し，また生産様式によって様々な形態を取る統制の問題である。封建制度の下ではこの可能性は経済外的強制によって現実のものとなり，資本主義の下では経済外的強制は取り除かれて剰余そのものが隠されているのである。

プロレタリアートの存在は現在の賃金だけでなく将来の賃金にも依存している。領主から独立して自己自身の剰余をも生産し消費する農奴とはちがい，資本主義の労働者は利潤の生産に依存している。彼らの利害は剰余価値を生産することの中にある。ここに資本主義的ヘゲモニーの物質的基盤があり，このヘゲモニーによっ

44) Braverman, *op. cit.*, pp. 124-125, 富沢訳，140-141ページ。

45) レーニン『なにをなすべきか』『レーニン全集』大月書店，第5巻，408-409ページ。

46) Braverman, *op. cit.*, p. 56, 富沢訳，61ページ。

て資本の利益は現在と未来の全体の利益として現われるのである[47]。だからこそ資本家は剰余を確保できるのであり，まさにこの点をブレイヴァマンは無視しているのである。

4. むすびにかえて

以上の資本主義的統制に関するブラウオイのブレイヴァマン批判をまとめておこう。

ブレイヴァマンは構想と実行の分離を資本主義的統制の根本的な構造としたが，この分離は資本主義以外にも存在するものである。この分離は資本主義的統制のひとつの表現でしかない。彼は資本主義的統制の本質を明確にしうる構想と実行の分離の特殊資本主義的な形態にまで踏み込むべきであった。しかしながら，出発点を資本主義内で構想と実行の統一を具現しているクラフトに求めることによって，彼は構想と実行の分離を本質としたのである。この本質は別の生産様式と資本主義的生産様式とを比較し，資本主義的統制の全てに共通な特徴を取り出すことによって得られるものである。そして，剰余価値をおおい隠して確保すること，これが資本主義的統制の本質である。

ブラウオイはこのように規定しているが，ではそのことによって何が見えてくるであろうか。本稿では，論評ぬきにもっぱらブラウオイの主張の紹介を行なってきたが，本稿での紹介に続くブラウオイのブレイヴァマン批判の更なる展開とその検討については続稿の課題としたい。

47) この考えの基礎になっているものとしてブラウオイは次のグラムシの言葉を引用している（Burawoy, *op. cit.*, pp. 72-73)。「ヘゲモニーの事実は，ヘゲモニーの行使を受ける諸集団の利害と傾向を考慮するということ，ある妥協的均衡が形成されるということ，すなわち，指導的集団が経済的一同業組合的ないくらかの犠牲を払うということ，これらのことを疑いもなく前提としてはいる。だが，ヘゲモニーが倫理的一政治的であるとしてもやはり経済的でもあらねばならず，指導的集団が経済活動の決定的な核心部分のなかで行使する決定的機能のうちに，その基盤をもたないわけにはいかない以上，上述の犠牲と妥協とが本質にかかわるものでありえないことも疑いがない」（『グラムシ獄中ノート』石堂清倫訳，三一書房，1978年，69ページ)。